国際関係研究所　シンポジウム記録

地域における多文化共生の現在地

2023 年 12 月 11 日（横浜校地にて）
「川崎市ふれあい館の実践」
**　鈴木　健 氏（社会福祉法人青丘社　川崎市ふれあい館副館長）**
「日本人 / 外国人の境界を越えて
**　―横浜市鶴見区のブラジル人が取り組む多文化共生」**
**　藤浪　海 氏（関東学院大学　専任講師）**
司会：山本直子（本学　国際社会学部専任講師）

鈴木　はじめまして、川崎市ふれあい館の鈴木健と申します。最初に自己紹介をさせていただきます。

私の父は日本人でしたが、母は朝鮮半島の出身です。つまり、僕自身が、コリアンルーツなのですが、韓国語というか朝鮮語が全くできないんですね。自分自身のルーツというのは、いいものというよりは、僕自身にとっては、どちらかというと嫌なものでした。こういうルーツを持つから、僕はこういう生活を送らなきゃいけなかったんだと思わされることがたくさんありました。15、16 歳の時、高校に入った時に、在日フィリピン人と出会っていったんですね。それで、ずいぶんフィリピンの人たちに僕自身もいろんな悩みを相談したり、フィリピンの人たちからもいろんな相談を受けまして、一緒にコミュニティづくりをしたりしていきました。それ以来、もうなんだかんだで早いですね、33 年ぐらいになりますかね。フィリピンの人たちとの出会いによってずいぶん救われ、フィリピンの人たちとコミュニティを一緒につくり、フィリピンの人たちと共にこれまでの人生を歩んできて、その中では僕、気づいたらね、フィリピンのタガログ語という言葉が

できるようになったりして、ほとんど僕、文化的にはフィリピン人に近いですよね。

ある時、フィリピンの人たちが僕のことを別のフィリピン人に紹介する時に、「健はね、顔は日本でね、血は韓国で、そして心はフィリピン、そういう人だよ」というふうに紹介をしてくれました。なんか僕それを聞いた時に本当にその通りだなと思いました。

いつもなんか余談ばっかりで時間が過ぎ去っちゃうんですけれども、今日は自分自身の活動の話というよりは、このふれあい館や、ふれあい館のある川崎の川崎区桜本という地域の歴史であったり、これまでの桜本における、さまざまな人が共に生きる取り組みというのが、どのようなものだったのか。そして、そこから多文化共生の今はどうなっているのか、自分自身が今感じていることなどをご紹介できればと思っています。

川崎市ふれあい館は1988年に川崎市によってつくられた施設です。地域の児童館とコミュニティセンター、難しい言葉で言うと社会教育施設というんですけれども、それらが統合された施設です。社会教育施設、コミュニティセンターとしてはどのような役割を果たしているかというと、在日韓国朝鮮人・在日コリアンをはじめとする在日外国人と日本人が子どもから高齢者まで文字通りふれあいながら差別のない共に生きる地域づくりをすすめていきましょう。そういう目的を持ってつくられた施設です。

川崎市ふれあい館は川崎市の施設なんですけれども、そこの施設を運営しているのは社会福祉法人青丘社という地域の社会福祉法人なんですね。ここの青丘社は在日大韓基督教会という在日コリアンのためのプロテスタントの教会が母体になっています。一番最初に、1969年に無認可の桜本保育園をつくって、1973年に社会福祉法人格を取り、1974年に認可保育園としての桜本保育園をスタートしたことを

はじめとし、保育園であったり、児童、学童、児童館、障害福祉、高齢福祉など、さまざまな事業をやっています。私たちの町に暮らしている人たち、誰もが安心して生きていけるような、共に生きていけるような地域づくりを 50 年間にわたって取り組んでいった法人です。

桜本というのは在日コリアンをはじめ在日コリアンの集住地域、そして今はとても多文化な地域なんですけれども、地域的な背景があるところなんですね。川崎の南部の臨海部の京浜工業地帯に私たちの町は位置しているんですね。ここの町の工業地帯での仕事を求めて、古くからですと沖縄からですとか、戦争中そして戦争の直後は朝鮮半島出身者、そして 1960 年代以降は日本の東北地方ですとか、農村からの出稼ぎで来た人が仕事を求めてやってきてつくられた町なんですね。このコリアンタウンも実は 2 年ぐらい前になくなっちゃっているんですけれども、在日コリアンの集住地域であったりしますね。この町は 1990 年以降、非常に多文化化していっています。

すごい昔だと、在日とかって言うと、すごい、「あっ、在日ね」という、「僕の友達にも在日の友達いたよ」みたいな話というのはよくあったんですけれども、今の時代って在日コリアンとか在日韓国朝鮮人と言っても、「なんですか？」みたいな感じの時代に入ってきちゃいましたね。在日というのはどういう存在なのかというところをまず最初にご紹介したいなと思います。

今から 100 年以上前、日本が朝鮮半島を植民地化しましたよね。そして戦争の時代に入っていきました。朝鮮半島が日本の植民地となる中でね、実は朝鮮の言葉であったり、文化というものは取り上げられていったりですとか、土地を取り上げられていったわけなんですね。そうやって生活ができなくなった朝鮮半島の人たちが日本にやってく

るようになったり、戦争の末期には朝鮮半島から強制的に日本に連れてこられたという人もたくさんいました。それが戦争終わった時、いろんな統計によってもかなり幅があるんですけれども、約 230 万人～ 260 万人ぐらいの朝鮮半島出身者が日本にとどまることになったんですね。戦争が終わって、ようやく植民地から解放された。じゃあ自分たちのふるさとに帰れると思っても、ふるさとに帰る手段はなかったんですよね。そうこうしているうちに、朝鮮半島では朝鮮戦争という戦争が始まってしまいます。実は朝鮮戦争って、今でもまだ終わっていないんですね。そうするとね、ますます日本にいた朝鮮半島出身者はふるさとに帰ることができなくなってしまった。そうやって日本での生活を余儀なくされた朝鮮半島出身者、そしてその子孫たちを在日コリアンって言ったりするんですね。戦争が終わって、じゃあこれからどうやって生活をしていこう？当時はとても厳しい貧困、そして今とは比べ物にならない厳しい差別がありました。その貧困と差別の中で、どうやったら生きていくことができるんだろうか。どこに行けば生きていくことができるんだろうか。全国を転々としながら、ここだったら生活ができるという場所で朝鮮人の集落をつくり、同胞、仲間たちが集まって、肩を寄せ合って生活を始めたんですね。そのようにして川崎にも朝鮮半島出身者がたくさん集まるようになっていきました。

その後うちの法人ができた 1970 年代、どういう時代だったかと言うと、これ、こういう時代でしたって僕が話すと、全部自分がその当時のことを知っているかのように、昔、何かのメディアに書かれてしまったことがあるんですけど、僕は 1974 年生まれなんで、僕がつくったということではなく、僕たちの先輩がつくってきたというような話ですけれども。一番最初に保育園をつくったという当時の話を伺うと、主に在日の 2 世、戦争中ですとか、戦後日本で生まれ育った朝鮮半島

出身者ですよね。この2世の人たちが親になる時期というのが1960年代後半とか70年代初頭だったようなんですね。2世の悩みって、3世である自分たちの子どもをどうやって育てていったらいいんだろうか、とても悩んだと言います。やはりね、まだ色濃く差別の残る時代だったようです。で、その子育ての中でたくさんの壁にぶつかっていったようなんですね。うちがなぜ、最初に保育園をつくったのかというと、うちの創設者の子どもも実際に地域の保育園や幼稚園に「朝鮮人の子どもだ」って言われて入れさせてもらえなかった。そういったことがきっかけになったと聞いています。だったら地域の中で自分たちの子どものルーツ、自分たちの文化を大切にできる保育園を自分たちの力でつくっていこう。それがスタートだったようです。

そういう差別の時代の中にあって、その当時、在日コリアンの中には自分たちの朝鮮の名前であったり、自分たちの国籍であったり、ルーツをみんな隠して日本風の名前を使って生活をしているという人たちがたくさんいたんですね。ほとんどだったんですね。でも、うちの保育園で、そうじゃなくて、ありのままの自分を大切にしよう。そういう子どもを育てる保育園をつくろうというので、さまざまな取り組みをしていったんですね。すごい熱量だったと思います。大変だったと思います。僕自身も、30歳真ん中ぐらいまでは、やっぱり自分自身のルーツというのを語れない時代でしたね。小さい時のことを思い出すといろんなことがありました。

そうやっていく中で、その子どもたちが保育園で本名を取り戻して自分たちの文化を大切にできるようになっても、小学校入ると、やっぱりね、学校の中でいじめられるんじゃないか、って言って、ルーツをまた隠していってしまう。ありのままで生きていくために、そういう子どもが安心して育てられるように地域で学童保育を始めました。そこでもね、自分たちの文化やルーツを大切にできるさまざまな取り

組みがあって、例えば、チャンゴクラブという韓国朝鮮の太鼓のクラブ活動を始めたりですとか、朝鮮の舞踊のクラブなどの取り組みを始めました。こういった取り組みを今でもやっているんですね。

ただ、こういった取り組みをやっていても、地域でそれが受け入れられているかというと、そうでもなかったようです。それがね、先輩が言うには、徐々に、変わっていった転機があったようですね。1980年代になって、ようやく川崎市が重い腰を上げて、川崎の教育委員会が在日外国人の教育基本指針というのをつくってくれたんですね。それにあたっては2世のお母ちゃんたちがもう何回も何回にもおよぶ教育委員会との話し合いが続いたと聞いています。最初、朝鮮人の子どもへの民族的な差別・いじめはありませんというのが教育委員会の姿勢だったようですが、お母さんたちが、自分たちの子どものいじめや差別の問題を力強く語る中で徐々に徐々に変わっていったと聞いています。

教育指針ができて学校の中での取り組みが一気にスタートしていったんですよね。そうすると、すごい地域全体が変わっていったというふうに先輩たちは言っていますね。学校の中で、例えば今でもやっているんですが、運動会の中でプンムルノリという韓国・朝鮮の学校をうちが手伝いながらやるんですね。今年も11月3日でしたかね、運動会でやりました。今年100人ぐらいの子どもたち、そして先生たち、校長先生も含め一緒にやりました。とてもいい日でしたね。こういう取り組みであったりですとか、小学校の中でキムチ作りみたいな授業、うちが関係する在日コリアンの高齢者のおばあちゃんからキムチ作りを習うみたいな取り組みを始めたんですね。そうすると地域が変わっていったという話を聞くと、子どもたちは学校の中でこういう経験を積んで楽しいという思いをしていくと、それが家の中でね、「今日、学校でこんなことやったんだよ」「あんなことやったんだよ」と話し、

「キムチ食べたいよ」と家で言うようになったと聞きます。それまでキムチと言うと、ニンニク臭いとかキムチ臭いという、そういう象徴であったわけなんですよね。多くの日本の大人たちはそういうキムチ臭いもの、ニンニク臭いキムチなんて絶対食わん、みたいなことを話していたようです。それがね、子どもたちが家に帰ってきて「キムチ食べたい」って言うとね、親もね、「そんなキムチなんて、もう食うな」って言えなくなっていくわけじゃないですか。「朝鮮の遊びをやりたい」って、「もう朝鮮の遊びなんて絶対駄目だ」なんてね、言えないわけじゃないですか。そうすると「しょうがないな」って言って、家の中でそういうものをやるようになったようですね。その話を聞いて、差別って誰がするのかって言うと大人がするんだなと思いました。子どもが生まれながらにして差別をするんじゃない。大人が地域の中で差別をするから、それを子どもが学んでいくんだなというふうに感じました。

そして、この先輩の話を聞いて、すごく思ったことがあります。学校が変わると地域が変わるということ。そういうことなんだなというふうに感じました。今でもこういう取り組みもしていますし、このチャンゴクラブとか舞踊クラブも、実はね、やっている子どもたちの多くが、日本の子なんですね。まあ、日本の子でも、もう実はお母さん自身が子ども時代にこのチャンゴクラブとかね、やって楽しかった。それを子どもたちに一緒にまたやってもらいたいと思って入れさせてくれるご家庭もたくさんいます。残念ながらコロナ以降はできなくなってしまっているんですけれども、コロナの前は、商店街の秋のお祭りに合わせて私たちでプンムルノリという韓国・朝鮮のパレードをやっていたんですね。これも実はやっている人たちのほとんどが地域の日本の人たちですね。フィリピン人であったり、ブラジル人も一緒になって太鼓をたたいたりして練り歩きますね。こういうのがすぐにできた

わけでなく、長年にわたり地域でいろんな人たちが共に生きるということを取り組んできた成果なんだなと思うんですね。こういう在日の文化、朝鮮半島の文化が私たちの地域では、既にとても豊かな地域の文化になっているというふうに感じています。

そうこうしているうちに、1990 年以降地域が多文化化していくわけなんですね。今、川崎市全体だと外国人の住民比率って 3% ちょっとぐらいなんですね。ただ、工業地帯の川崎区は今、外国籍の住民比率って 7 パーセントぐらいになっていますね。駅周辺の一番外国人の多い地域では 9.6% とか 9.7% ぐらいになっています。それぐらい多文化な地域になっているんですよね。こうやって新しく外国から川崎にやってきて生活を始める人たちが増える中で、新しい私たちの取り組み、チャレンジがスタートしていきました。

私たち、ふれあい館は、地域の児童館でもあるので、普段地域の子どもたちがたくさん遊びにきていますね。よく、ふれあい館って外国につながる子しか使えないんですか、という話がありますけれども、そういうことではなく、あくまでも地域の児童館なので誰もが使える施設なんですね。なので、放課後、思い思いに子どもたちがたくさん遊びにきます。それで僕、本当にいいなと思うことが 2 つあって、いろんな年代の子どもたちが一緒になって遊び合えるということがとてもいいですね。今、学校では不登校ということが大きな問題になっています。不登校の子どもたちが年々増えていっています。やっぱり学校って、どうしても同じ学年、同じクラスの中でしか友達付き合いがなかなかできないですよね。そこでうまくいかなかった時に、やっぱりね、学校に通いづらくなってしまう、学校に通えなくなってしまうということがたくさんあると思うんですね。でも、ここの地域の児童館では、そういう 1 つのクラス、1 つの学年でなく、いろんな子ども同士が共に遊び合えるというところがいいなと思います。

もう一つは、その中でいろんなルーツを持つ子どもたちが一緒になって遊んでいるという姿を見ると、僕はそこにいながらも、とてもいいなと思います。もう日本人の子どももコリアンルーツの子どもも中国人の子ども、ベトナム人の子ども、フィリピン人の子ども、みんなそういった子どもたちがたくさん遊び合っているんですね。

でも、その中で、外国から来たばかりの子どもたちは、やっぱり日本での生活って大変なんですよね。日本に来た直後、もう日本語はゼロなわけじゃないですか。友達は誰もいないわけじゃないですか。新しい環境の中でゼロからの生活を始めていくということ、大人にとっても大変ですし、子どもにとっては、もっともっと大きなストレスもかかったりもしますね。そういう外国から来たばかりの子どもたちの学習サポート、居場所づくりというのに、うちは今、とても力を入れています。今、川崎区内で小学生の教室、居場所というのを３カ所やっていますし、中学生の居場所が１カ所、高校生の教室も１カ所、そしてフリースクールといって、中学校の年齢を超して日本にやってきた子どもたちの居場所づくり、フリースクールというのも１カ所やっていますね。中学生の教室では、高校生になったフィリピンの子たちが、お手伝いをしにきてくれたりもします。

最近、今年外国から来たばかりの子どもたち、特に小学生世代がすごく増えているんですよね。とりわけ今年の初旬とか、だんだんコロナの規制が緩和されていったところで、２学期の８月、９月の夏休みの後半、もう連日のように、「今日来ました」という子どもたちが増えていきました。で、もう小学生の教室は３カ所ともパンクしていますね。それぞれ20数人ずつぐらいは集まっています。こういう小学生・中学生・高校生のサポートをしながら、最近ですと外国につながる子ども・若者のキャリア支援みたいなところにも力を入れています。小

学生・中学生・高校生の応援をして、その若者たちが社会の中で生きていけるようなキャリア支援というのにも力を入れています。

子どもたちのことだけではなく、親や大人のサポートというのもたくさんしていますね。地域の日本語教室というのをやっていて、子どもたちをうちのキッズスペース、子育て支援センターで預かりながら、ママたちは勉強しているようなことをしていたり、また教える日本人のボランティアさんも日本語を一方的に教えるということでなく、お互いの文化を共に学び合うということを大切にしています。翻訳・通訳バンクで外国から来た人たちが言葉の壁によって孤立しないような通訳の派遣であったり、多言語情報への翻訳というのも取り組んでいたり。さらにコロナ禍以降、多言語情報をより積極的に届けていこうと SNS を使って多言語情報の配信のサービスみたいなのを始めたりですとか、地域の人たちと一緒に、やっぱり外国籍の人はね、生活大変な人が多くて、食料支援みたいなことも取り組んでいますね。毎回たくさんの人たちが来てくれて、11 月ですと 100 世帯ぐらいが来てくれましたね。で、そのうちのだいたい 80% ぐらいは外国籍の世帯の人たちですね。このようにして新しく外国から来た人たちが地域の中で安心して共に生きていけるように子どもから高齢者まで、さまざまな事業をやっています。

最後に今の時代に、私たちがどのような課題を感じているかという話をさせていただければと思います。

僕がよく家庭訪問に行くフィリピン人の家のアパートの扉のところには、フィリピンの言葉とか英語とかで、「月曜日！」とか、ごみの分別について書いてあるんですね。よく多文化の問題で、ごみ問題っていうのも言われたりもしますけれども、こういうふうにしてね、とても各家庭、家庭で工夫をするんですね。でも、やっぱりまだまだ言

葉の壁というのはたくさんありますね。僕は、日本でも多言語サービスみたいなものが当たり前の社会サービスになっていくといいなと思っています。やっぱりね、その人の分かる言葉で生活する。多言語というのは１つのサービスであると同時に権利でもあると思うんですね。そういう言葉の壁というところが引き続き１つの課題だと思います。やっぱりね、この川崎の南部って、とても豊かにいろんな人たちがつながり合って、支え合って人が生活をしているんですけれども、そういう地域にあっても孤立という問題が徐々に深刻化していっているんですね。

七夕の時期、あるフィリピン人の家庭の子どもが書いてくれた短冊には、「将来幸せな家庭をつくれますように」と書いてありました。これを書いてくれた当時、その子は中学校１年生でしたね。その子どもたちが、なぜ、そのこういう短冊を書かざるを得なかったかというと、お母さんが１人の母子世帯で、とても孤立していました。児童手当ですとか、児童手当、児童扶養手当という１人親の手当も実はもらっていなかったんですよね。出会ってから、一つ一つそういう手当をもらえるように手続きをしていきました。お母さんはね、孤立をして人生いっぱいいっぱいになっていて、もう自分たちの人生、子どもとともに人生を終わらせよう、という寸前のところでした。僕たちが気づいて、お母さんと話し合いを重ね、一緒に生きていこうって涙をした日の夜のことは忘れられません。こういうふうにして孤立をしている人たちがどんどん地域の中でも増えているなと感じています。

そしてね、孤立をして困難な状況がどんどん子どもたちの世代に連鎖をしているなって感じるんですね。今、僕が関わっているフィリピン人の世帯とかも、早いものですね、フィリピン人の２世世代、３世世代になっているんですよね。日本で生まれ育ったり、10代でフィリピンからやってきた、かつての子どもたちがみんな今お母さん世代

になっているんですよね。そして、その子どもたち、3世である子どもたちを今、僕、面倒をみています。今のお母さんたちの幼少期もずいぶん大変でした。そして今も3世の子どもたちもまた大変だ。そういうね、貧困の連鎖みたいなのがすごく顕著になっていっているなと思います。

前半で紹介した若者など、外国につながる若者の、一生懸命サポートをすれば、大学にも行けるようにもなりました。でも多くの若者は大学に行きたいとか、将来、親とは違う職業に就きたいと言っても、結局なかなかそれがかなわず、親と一緒に工場労働に組み込まれていってしまうということが顕著になっています。そういったところを乗り越えていく新しいチャレンジができたらいいなと思います。いずれにしても、私たちはこういった新しい課題に向き合いながら、地域とともに、家族とともに、多様な人たちが共に生きる地域づくりをすすめていっているところです。長くなりました。終わりにしたいと思います。

（拍手）

山本　鈴木さん、ありがとうございました。私のゼミでも学生と一緒に地域の団地のインド人コミュニティと少し関わっているんですけれども、そのコミュニティと似ている部分もあるし、違っている部分もあるんだなと興味深く聞いていました。多分、後ほどいろいろ質問したい学生もいらっしゃると思いますけれど、またお話が終わってから時間を取りたいと思います。

では続きまして、藤浪 海先生のお話をお願いいたします。

藤浪　こんにちは。関東学院大学の藤浪と申します。私は健さんとは違って、エスニック・マイノリティとしての背景はないんですけれども、皆さんと同じ大学生の時に横浜市鶴見区の団体でボランティアをし始めて、今ずっとその活動をしている横浜市鶴見区のABCジャパンという団体のことを今日はお話したいと思います。先ほど鈴木さんがお話してくださったように川崎区がお隣にあるんですけれども、鶴見区も同じように、やっぱり京浜工業地帯の中核としてあって、戦前から在日の人たちや沖縄の人たちとかがたくさん暮らしてきた地域です。東京の近くでブラジルの人とかボリビアの人がたくさん住んでいる地域って珍しいとは思うんですけど、南米の人たち、ペルーの人とかアルゼンチンの人とか、そういった人たちが多く暮らしている地域でもあります。街を歩けば、沖縄料理屋さんや、ブラジル料理屋さん、ボリビア料理屋さんにも出会うことができます。沖縄の人たちと南米の人たちが一緒の地域に暮らしているので、こういうふうにエイサーを踊っている向こうにブラジル料理屋さんとかがあったり、そんな感じの街並みになっています。

私たちのABCジャパンという団体は2000年にここの地域に暮らすブラジル人の住民がつくった団体で、鈴木健さんの活動なさっている青丘社とも連携しつつ、外国人住民の支援を行っている団体になります。主には大人の自立支援、心のサポート、子どもの教育保障、コミュニティづくりというところに力を入れていまして、大人の自立支援というところでは日本語教育や生活情報のガイダンスのこともやっているんですけれども、鶴見は南米の人たち電気工事の仕事をやっている人がとても多いんですね。それで外国人のための電気工事士の資格試験対策講座みたいなこともやっています。

あと、やっぱりコロナの時とか、いろいろ外国人の人たちが精神的につらくなったりとかしていたのですね。たとえば子どもたちもずっ

と帰国できなくなっちゃって、楽しみにしていた自分の出身国に帰って友達に会うこともできなくなって、すごく気分が落ち込む子どももいました。そういうふうな人たちに自分たちの母語で臨床心理士の人にカウンセリングをしてもらうってこともやっています。あとは子どもの教育保障ということでフリースクールであるとか、母語母文化の教室であるとか、将来に希望を持てるようにということで進路ガイダンスとかガイドブックを作ったりしています。

今日ちょっとお話したいのはコミュニティづくりのところですね。団体のホームページに載っているのですけど、団体はこのコミュニティづくりという時に、「私たちが考えるコミュニティというのは外国人のコミュニティのことではありません。国籍関係なく、いろんな人がいるコミュニティとして捉えています」と説明しています。特にニューカマーの人がつくる団体って、割と同じ出身国の人たちだけで集まるという団体もあるんですけど、ABC ジャパンはいろんな人たちが、もう日本人も中国人も、ベトナム人もネパール人も関係なく、一緒に団体運営に関わったりして、その中で国籍関係なくコミュニティをつくっていくという活動に注力をしています。

例えばですね、理事長はブラジル人なんですけど、理事長に関東学院大学の学生に向けて話をしてもらって、それで最後に私が「今日は貴重なお話ありがとうございました。皆さんもぜひボランティアしてみてくださいね」というふうに言ったら、その理事長が「ボランティアじゃなくても、ただ遊びに来るだけでいいよ」というふうに言ったんですね。支援団体って言うと、ただボランティアをしに来るとか、そういうことを想像しがちなんですけど、ただ遊びに来るだけ、「日本人の人、遊びに来るだけでも全然いいですよ」というふうに発言して、移民にとっての居場所であることを目指すだけでなくて、日本人にとっても気軽に立ち寄れる場所を目指すことを話したんです。

今日は鶴見に南米の人たちが集まった経緯を確認しつつ、ABC ジャパンがこのような国籍や出身国を越えたコミュニティづくりの理念を持つようになった背景を紹介したいと思います。まず鶴見にどうして南米の人たちが集まったかってことなんですけど、ちょっとこの鶴見にある料理屋さんを見てほしいんですけど、これ不思議な看板でラテン料理プラス沖縄料理って書いてあって、両方売っているんですね。実はですね、よく日系ブラジル人とか言いますけれども、鶴見に暮らしている南米の人たちの多くは沖縄ルーツです。南米の人たちの家とかに行くと玄関にシーサーが置いてあったり、食卓にゴーヤチャンプル並んでいたり、よく沖縄の音楽を聞いたり弾いたりしていたりしています。それで私、鶴見に沖縄県人会という沖縄の人たちのコミュニティがあって、そこで幹事をやっているんですけれども、そこにも南米の人たちがたくさん参加をしています。この写真は三線を弾いているブラジルの人ですね。これ演奏しているのは南米ルーツの子どもたちなんですけど、沖縄の楽器の三線弾いたりしていて、子どもたちの活動の中でも、やっぱり沖縄というアイデンティティが強かったりして、結婚したら比嘉とか新垣とか沖縄の名字、自分のこの沖縄というルーツが名前から消えちゃ

鶴見の沖縄・ラテン料理店

三線を弾く南米系の子どもたち

うというのが悲しいというふうに話してい女の子だったり、沖縄の言葉を勉強したいというふうな子だったり、そういう南米の子たちによく出会ってきました。

なぜ鶴見にこういうふうな沖縄ルーツの人たちが集まったかというと、そもそも沖縄というのは琉球王国という１つの国で、首里城というのはその王宮だったわけですけれども、日本に併合されて、また朝鮮半島の方もさっきお話があったようにもともと１つの国だったのが日本に併合されて、鶴見には朝鮮半島や沖縄からたくさんの労働者がやってくるようになりました。それでこの時に沖縄からは、もちろん日本だけじゃなくて、南米とかハワイとか、そういった地域にもたくさんの人が移住をしていたんですね。日本に併合されて貧困であるとかいろんな問題が起きて、沖縄からたくさんの人たちが南米に移住しました。それでアジア太平洋戦争で、沖縄は皆さんよくご存じのように激しい地上戦を経験しまして、もう土地の形が変わるほど、もう1945年の４月から６月23日まで――その後も戦闘は続くんですけど――この戦火の中を逃げまどうという形になってきます。もちろん畑とかは全部焼けてしまうわけですよね。こういう戦争で。

その後、米軍統治が行われて、今も米軍基地の問題ってあると思いますけど、もともと自分たちの土地だったものが基地になっちゃう。そうすると、もちろん自分たちの畑とかも使えなくなっちゃうわけですよね。その中で沖縄で暮らしていけなくなってしまう人が出てくるわけです。米軍基地も確かに新しくできたんだけれども、アメリカ人とかフィリピン人とか日本出身の人よりも沖縄の人たちはまったく安い賃金で働かされて、もう米軍基地で働いても全然お金にならないという状況が続くんですね。そうした中で戦後も鶴見に、また沖縄からたくさん人が集まってきました。それでこの写真のように、現在も沖縄県人会の運動会が開催されたりしているわけです。

鶴見沖縄県人会の運動会

もちろん鶴見だけじゃなくて、戦後も海外に移住していった人たちがいます。戦前に世界各地に移住していった沖縄の人たちが「沖縄が大変な目に遭っているから、沖縄の人たちを助けなければ」ということでブラジルとかアルゼンチンとかペルーとかハワイとかボリビアとか、いろんなところで沖縄救済運動というのを立ち上げて、沖縄からそういう人たちがまた新しく人を受け入れていきました。今、ボリビアにはコロニア・オキナワという沖縄という名前のついた地域があって、写真のように沖縄スーパーマーケットというのがあったり、ブラジルにもこの写真に示したように沖縄県人会というのがあったりして、沖縄の人たちが集まるコミュニティになっています。こういうふうに沖縄からブラジルとかボリビアに戦後移住していった人がたくさんいます。

こうしたなかで1980年代になると、鶴見はバブル景気にわくようになりました。鶴見の沖縄出身の人のなかには特に建設業で働いている人が多かったのですけど、このバブル景気の中でどんどん人手不足になってしまったんですね。その中で、「沖縄から人を呼んでも全然人が足りないから、南米から沖縄ルーツの人を呼び寄せよう」ということで、南米から沖縄ルーツの人がたくさん集まってきました。もちろんお金を稼ぐということもあったんですけど、日本へのあこがれがあったり、親から「日本に行って日本のことを勉強してきなさい。沖縄のことを勉強しなさい」と言われたり、そういういろんな意味があって鶴見にたくさん南米の人が集まってきました。

鶴見では今、南米の人たちが自分たちで独立して電気工事業者としてたくさん働いています。例えば東京タワーの電気を交換しているのは実は鶴見の南米の人たちなんですね。日産スタジアムの電気を換えているのもそうですし、例えば地下鉄だとかAmazonの倉庫とかも南米の人たちが電気工事をしていて、だから皆さん多分見えないところで南米の人たちの工事の恩恵を得ているのかなというふうに思います。

ブラジル系電気工事業者の事務所

これは鶴見のある電気工事業者の事務所の写真なんですけど、こういうふうに棚にシーサーが置かれたりしていて、やっぱり沖縄とのつながりを感じられるんですね。さっきも言ったように鶴見の沖縄県人会の中で、この写真のように南米の人がたくさん参加をしていて、南米の人たちがバーベキュー大会を県人会で開いてくれたり、南米ルーツの2世とか3世の子たちがみんな家族をつくって県人会に参加しているという感じになります。

こんな感じで鶴見には南米の人たちが、たくさん集まってきたんですけれども、ではABCジャパンはどういうふうな活動をしているのでしょうか。先ほども申しました通り、この団体は移民当事者としてブラジル人自身がつくった団体で、この安富祖美智江理事長が中心となり方針を立てて活動しています。安富祖理事長の両親は沖縄県の恩納村という、今はリゾート地になっている地域の出身で、安富祖さん自身は沖縄ルーツの2世になります。1968年にブラジルのサンパウロ市の近くで生まれ育ちました。日本へ移住したのが1990年で、日

本や沖縄のことについて勉強してほしいというご両親からの希望があって、日本に来ました。本当は沖縄に行くつもりだったらしいのですが、沖縄だと生活費を稼げないから、群馬に移住して食品系の工場で働いていた後に、先に鶴見に来ていたお兄さんを頼って鶴見に移住してきて、鶴見ではブラジル料理店や国際電話の仲介会社で働いて、2000 年に移民の支援団体、ABC ジャパンを結成したという方になります。

なぜこの安富祖さんが団体を立ち上げるようになったかというと、もともと彼女は鶴見でブラジル料理店で働いていたんですが、先ほど鈴木健さんから孤立の話があったように、やっぱり南米の人の中にも、1 人で日本に働きに来て、話し相手が欲しい人が多かったそうなんですね。閉店の時間になって午前 3 時とか 4 時になっても話し続けて、全然帰らないお客さんがいて、この人たち本当に寂しいんだな、この人たちに頼るところがないんだなということを痛感したそうなんです。その後彼女が勤めた国際電話の仲介会社でも、ポルトガル語で在日ブラジル人からの電話を受けると、国際電話関係の問い合わせを受けたはずなのに、もうとにかく「宅配便どうしたらいいのか」とか日本での生活についてたくさんの質問をされて、南米の人たちの頼るところが本当にないんだなということを痛感するようになって、この団体を立ち上げたそうです。

それでこの団体を 2000 年に立ち上げたんですけど、子どもの教育に今は力を入れています。なぜ今、教育に力を入れているのかというと、安富祖自身も娘さんが 2 人いらっしゃって、自分が子育てをする中で自分 1 人じゃ子どもの教育について全然うまくできなかったという経験があるそうです。上の娘さんが 1 人いたのに、下の娘さんの時に音読という言葉を初めて知って、上の娘さんは親に頼らず 1 人で勉強を頑張っていたんだなということをこの時初めて分かったそうなん

です。「もう本当に自分が情けない」というふうに安富祖さんはこの話をしながら言っていたんですけども。それで安富祖さん自身も、ブラジルで移民の子どもだったわけですよね。その中で、全然親はポルトガル語分からないから、大学進学の手続きとかお金のこととか全部自分自身でやらなきゃいけなくて、もうそれも大変だったというふうに言っていました。それで安富祖さん自身の移民の親としての、また移民の子どもとしての経験があって、やっぱり子どもの教育でサポートが必要だよねということで、今、教育に力を入れています。

それでやっぱり安富祖さん自身の移民の親として自分がちゃんと子どもの教育に携われていなかったという、そういう後悔があって、移民の親への支援にも団体として力を入れています。学校行事に合わせて、例えば運動会ではどういうふうな日本語を使うとか、面談ではどういうふうな日本語を使うとかを教えて、親に対していろんな支援をしています。もちろんフリースクールに通う子どもたちにも親に適宜連絡を取って、子どもがどういう状況なのか、ちゃんと親に伝えるようにして、親が教育に関われるようにもしています。

あともう一つ重要なのは、居場所ということもABCジャパンでは重視しています。外国人の居場所になるようにということも力を入れているんですけど、そのイメージの背景としては、安富祖さん自身もやっぱり移民の子どもとしてブラジルで生活をしてきて、その時に彼女の居場所になったのが、さっきの沖縄県人会みたいな沖縄の人たちのコミュニティだったそうなんですね。当時、当然携帯電話もないし、インターネットもないから、友達と遊ぶには約束をして集まらないといけないんだけれども、沖縄会館という場所に行けばもう沖縄の子たちがみんな集まっているから、そこに行けばダーツとかバレーボールをみんなでできる。卓球もみんなでできる。カラオケもみんなでできるという場所で、連絡をしないで行っても友達に会えるから、すごく

自分にとっていい居場所だったというふうに言っていて、その沖縄会館みたいな居場所がやっぱり日本の子どもたちにも必要なんじゃないかというふうに思って、今、団体を運営しているそうです。例えば、この写真のような多文化交流カラオケ大会というのをやったりしたんですけど、カラオケってブラジルの県人会でとても盛んで、この多文化交流カラオケ大会もブラジルの沖縄会館をイメージしてやっていたそうです。

つるみ多文化交流カラオケ大会

ただ、ブラジルの沖縄コミュニティを反面教師にしている部分もあって、ブラジルで、お母さんたちから「外人が危ない」って――「外人」って非日系のブラジル人のことですね――「何されるか分からない」というふうに言われて、「ブラジル人とは付き合うな、結婚するな」と言われたそうなんです。「ブラジルの沖縄コミュニティはゲットー化している」とちょっと強い言葉で安富祖さんは言うんですけども。もちろんここには事情があって、安富祖さんが大人になってご両親から話を聞いて分かったことなんだそうですけれども、やっぱり沖縄で地上戦があって、米軍の人たちにも沖縄の人たくさん殺されて、もちろん日本軍の人たちも沖縄の人たちをたくさん殺しましたよね。それをご両親は間近で見ているので、沖縄の人以外信用できない。米軍の人とか日本人の人に沖縄の人が普通に殺されているんで。それは安富祖さん自身もう理解はできたそうですけれども、ただ、やっぱりブラジル育ちだった安富祖さんからすると、「ブラジルで自分は生まれ育ったのに、なんで沖縄の人たちとだけしか付き合っちゃいけないんだろう」という、そういうふうなモヤモヤがずっとあったそうで、外国人

とか日本人とか、そういう違いを越えてコミュニティをつくりたいという気持ちがとてもあったそうです。だからこそ外国人が日本人と交流できるように日本語だけでなくて、マナーとかいろんなこと、例えば日本の食事の調理実習とか、そういうことを教えていたりして、日本人と交流できるようにしています。

たとえば入学式って、日本だと親はスーツというのが当たり前かもしれないけど、外国人にとっては、それは当たり前じゃないわけですよね。でもそれを知らずにジャージとかで参加してしまったら、また「外国人はやっぱりダメだ」とか、そういうふうに言われて関係が築けなくなっちゃうとか、そういう経験があったりして、日本のマナーとかそういうことを外国人に伝えることにも力を入れているわけです。

ただもちろんそれだけじゃなくて、日本人の側にも、もちろん外国人の気持ちを分かってほしいということで、地域とか学校でのイベントに参加をしています。あとこの写真は「外国人の気持ちになってみる」というワークショップですね。これはABCジャパンに通う子たちにポルトガル語とか中国語で、日本人の生徒や学生相手に授業をやってもらうんですね。そうすると日本人の子たちは何しゃべっているか分からない。でも外国人の子たちは、それを10分とか20分じゃなくて、もうずっと生活の中でそれを経験していて、すごく大変な気持ちなんだよということを分かってもらおうという取り組みです。あとは、自分たちは助けられるだけの存在だけじゃなく

「外国人の気持ちになってみる？」のイベント

て、日本社会の中の一員として、みんなを助ける存在でもあるんだということで、災害支援などの活動も行っています。

安富祖さんは、よく「鶴見人」というふうに自分のことをアイデンティフィケーションするんですけど、彼女はブラジルでも日本でも外国人扱いをされたと言うんですね。ブラジルでは日本人と言われた。日本ではブラジル人、外国人というふうに言われた。ブラジルでも日本人でも外国人扱いだったけれども、だけどそういうのは関係ない。だから一番言いやすいのは鶴見人だというわけです。この鶴見人というアイデンティフィケーションの言葉は、実は私たち日本人に投げかけられた、「一緒に鶴見に住んでいるということは変わらないよね、だから日本人とか外国人とかそういうことじゃなくて、一緒に仲間として社会をつくっていきましょう」という呼びかけでもあるのですけど、そういうふうな安富祖さんの思いがあって、ABC ジャパンでは日本人も外国人もお互いに交わり合いながら共に生きる住民として社会をつくっていきましょうと、そういう思いで活動を行っています。はい、以上になります。

（拍手）

山本　藤浪先生、ありがとうございました。お二人のお話を伺って、国境を越えた人の移動というのは、日韓併合であったり、植民地主義であったり、戦争とかバブルとか、不況とか、そういった国際関係がきっかけになって起こるんですけれども、その結果、移住した先にあるのは人々の生活なのだと思いました。人の生活がある以上、社会福祉とか言語、教育、貧困、いろんな問題が生じてくるんですよね。そして、それを地域で支えていくというのが本当に重要なんだなということを私自身も実感しながら聞いていました。会場の皆さんも、いろ

いろ質問とか、聞いてみたいこととか、頭に思い浮かべながらのお話だったんじゃないかと思いますので、ここで質疑応答の時間をとりたいと思います。質問のある人は、ぜひ挙手をしていただければと思います。質問、こんなこと聞いてみたいなということがあれば、ぜひ手を挙げてください。

質問者１　お二方のお話を聞いていて、在２世のお子さんと、その在２世のご両親たちの、その言語の壁というのも藤浪先生のお話にもあったように音読の学校の宿題とか関わってくると思うんですけど、実際お二方が在２世の家族と関わっていて、その家族間での言語の壁を実感している問題があれば教えていただきたいです。

鈴木　自分自身を振り返ってみると、例えば、小さなころ、絵本を読んでもらった記憶ないなと思って。まあ、考えてみたらそうだよね。「うちの母ちゃん日本語読めないもんな」とか。ちょっとひどい息子だと思うんですけど、中学校ぐらいに入ると、「勉強しろ、勉強しろ」と言うわけじゃないですか。もうかなり反抗期が強かったんで。「勉強しろ、勉強しろって言うんだったら、あなたが日本語できるようになってから言えよ」みたいなことを言ってしまったのをいつもとても懺悔をしています。フィリピンの人たちはどうかって言うと、親子関係って必ずしも言葉だけじゃない愛情関係って、やっぱりあるじゃないですか。だから、どうしても言葉を介したコミュニケーションって難しい部分があるにしても、それだけではない愛情関係というのが、フィリピンの人たちに豊かにあるなというふうに感じることもあるんですね。でも一方で、やっぱり反抗期になった時とかの親子の葛藤みたいなところは、なかなか言葉でのコミュニケーションなくして乗り越えていくということがすごく大変で、やっぱりその衝突がすごい激しく

なっちゃったりする子どもたちも結構いて、今もめちゃめちゃ苦労していますし、そういう子どもから頼まれて「母ちゃんとの話、通訳してよ」みたいな感じで通訳に入ったりとかすることもあったりもします。

藤浪　ご質問ありがとうございます。そうですね、言葉の部分と愛情の部分というふうなお話がありましたけれども、やっぱりその言葉だけではなくて、やっぱりその他の部分も関係しながら関係がつくられてくると思うんですけど、例えば言葉だけじゃなくて文化の違いもありますよね。例えばブラジルの人たち、よくハグする文化がありますよね。普通に挨拶で。やっぱり子どもたちとしては学校行事で親が来てハグするのが恥ずかしい。日本人の前でそういうことやらないで。だけど親としては、それが普通なことだから、子どもにこれは何も恥じることはない文化だと伝えたいんだけど、それをうまく伝えることができない。そうすると、だんだんすれ違っていくみたいな部分があったりして、言葉でなかなかそういうことをうまく意思疎通することができないという。あと知識の問題もあって、親としても教育に関して子どもに「いや、もうちょっとこういうふうにした方がいいんじゃないの」というふうにアドバイスしようと思っても、自分もなかなかそういうことが分からなくてアドバイスできないとか、そうすると子どもの方も、もう親は頼れないから自分１人でやるみたいな形になったり、そういうことはあるかなと思います。

山本　他、質問ある人いらっしゃいますか。

質問者２　鈴木さんのお話でキムチ作りの交流会でのお話の中で、学校が変わると地域が変わるという言葉が印象に残ったとおっしゃって

いたのですが、あるべき学校の姿というか、理想とする学校の姿というものを教えていただきたいです。

鈴木　どんな学校がいいんですかね。簡潔に話をするのは、とても難しいなと思うんですね。でも、そうですね、これ多文化共生とかとは関係なく、さっきもちょっとだけ触れましたけれども、不登校の子がどんどん増えていって、3年前から2年前も20%増ぐらいで増えていって、2年前から去年もまた20%増ぐらいで増えていって、今だいたい学校に通えてない子どもが全国で小中学校、義務教育段階で約30万人ぐらいかな、いるんですね。これって、この勢いで増えていったら、下手したら学校行けている子どもより、学校行けてない子どもの方が逆転する時代というのも、いつか来てもおかしくないなと思うんですね。従来、既存の学校に適応できてないというのが不登校の子どもだという捉え方が多かったんですけれども、僕違うと思うんですね。今の学校が今の子どもたちに適応できていないというところから子どもたちは学校に行けなくなっていっている。子どもたちが学校に適応できてないんじゃなくて、学校が今の子どもたちに適応できてないと捉えていかないと、これだけ増えている不登校の子の事象というのを説明しきれないと思うんですね。

じゃあ、どういった姿が理想なのかというのは非常に難しいんですけれども、僕の知っている大学の先生とかがよく言うんですけど、学校をもっとカラフルなものにしていこう。多様性であったり、いろんな地域との関わりであったり、いろんな人たちが関わって、いろんな人たちがいれる、こういうカラフルな学校にしていこうというような話をするんですけれども、僕もそう思うんですね。やっぱり学校がもっと多様な存在になっていくといいなと思います。

ただ、非常に難しいのは、今、学校の先生の多忙化であったりと

か、教員の成り手不足の問題というのが非常に深刻ですね。僕もいろんな学校にお手伝いに行くんですけれども、やっぱり先生が足りなくて、もうどうにもなんないやということだらけになってきていますね。なんかそういう学校が変わっていくということと、今のそこの学校というものがどういう存在であるのかというのをいろんな人で考えながら、これからの学校の姿をどうしていったらいいのかというのをもっといろんな人たちで話し合うチャンスがあるといいのかなと思います。

質問者３　鈴木様のお話の中で母子世帯というキーワードが出たと思うんですけれども、川崎市だけじゃなくて鶴見区でも、その外国人の母子世帯について、私、研究をしておりまして、その在日外国人の母子世帯が孤立してしまって貧困に陥ってしまったというお話があって、そのような人たち、どのように発見しているのかと言いますか、なんか別に声を上げるわけじゃないと思うんです。なので、どういうふうに救いの手を差し伸べているかというのをお話を伺いたいと思います。お願いします。

鈴木　そうですね。僕、最近ちょっとあんまり関われていないんですけど、藤浪さんがね、鶴見でABCジャパンというグループと関わっていて、僕は川崎でフィリピンのシングルマザーと子どもたちのカラカサンというグループをフィリピンのシングルマザーの人たちと一緒に1990年代からつくっていっていたんですね。当時ね、1990年代はまだ日本の中で多文化共生という言葉もあんまりなく、外国人支援とかっていうのもまだあんまりない時代でしたけど、その中でいろんな活動をしていって、当初フィリピンの人たちってね、すごい家族を大切にして、すごく幸せな家族というのを人生の理想とするというと

ころがあったりもするんですね。でも日本に来て、やっぱり生活がうまくいかなくて、よく当時ブロークンファミリーとかって言っていましたけれども、そうなっていくというのは、自分たちの追い求めた姿と違う現実というものをなかなかコミュニティの中で伝えられなくて、本当は離婚しているのに離婚してないよ、みたいな、ところであったり、DV、日本人の夫からの暴力があっても、それをもう誰にも知られたくないみたいな女性たち、たくさんいましたね。

そんな中で、なかなかそういう訴えができないというところで当事者同士が、そういう女性たちが一人一人つながり合ってカラカサンというグループをつくっていきました。そういうね、歩みがあったわけなんですけれども、ただ、今の時代、コミュニティの中で圧倒的にね、フィリピンの人たちの母子世帯が2000年代以降増えていったんですけれども、これってやっぱり1つは日本のフィリピン人の受け入れの仕方がとてもまずかった部分がたくさんあるんですね。政策的につくられていったというところがあります。今日はちょっと、そこの詳しいところには触れませんけれども、今のフィリピン人の母子世帯がとても多いというのは、政策によってつくられていったというところがあります。

その中でコミュニティの中で支え合って、なんとかして生活をしていったわけなんですけれども、今コミュニティが徐々に高齢化をしているんですね。僕の昔関わっていたかつてのお母さんたちも子どもが巣立っていったりして、まだ本当の高齢者まで行かないですけど、徐々に高齢化が差し掛かってきて、子どもたちが今となってシングルマザーから、また単身の女性になっていっているんですけれども、なかなかね、コミュニティの中だけでは支えきれない孤立の問題というのは深刻化しています。

じゃあ、どうしたらいいのかというのは、今、日本でもね、徐々に

孤立・孤独の問題というのが社会化する中で、どうやってそれを防いでいくのかという議論も始まっていますけれども、孤立している人をいかにして発見し、支えることができるのかという、そういう孤立している人と出会うための仕組みづくりということ、そして孤立している人を支えるって、すごいエネルギーを使うんですね。出会うための仕組みづくりと支えるためのチームづくりというのを両輪として地域づくりをすすめていきましょうって、今いろんなところでお話をしているんですね。だから、そういう地域住民のコミュニティでの支え合いじゃなくて、そういう社会的なシステムとして孤立している人を支えていくということが大切かなと思っています。

藤浪　ABC ジャパンの場合は、先ほどブラジル人とか中国人とか国籍・出身国関係なくコミュニティを作る、みたいな話をしましたけれども、そもそも ABC ジャパンの場合はブラジル人当事者が運営しているので、ブラジル人同士のネットワークというものがすごく強くて、その中で結構何かあると情報がすぐ流れるので、そういうところで誰が困っているかどうか分かったりしますね。あとやっぱり中国とかネパールの人とか、そういういろんな国の人たちとつながって、それぞれのつながりの中で「ちょっとこの人困っているかも」みたいな情報が入ってきたり、あと学校と連携している中で学校からそういう情報が入ってくることもあります。学校としてこの家庭がちょっと心配なんだけど、外国ルーツの子でどういうふうに対応すればいいのか分からないから、ちょっと間に入ってくれないかという形で、学校とか行政とかから ABC ジャパンに相談が来たりするということもあります。

さっき鈴木さんがおっしゃったように、やっぱりコミュニティの中だけの支えだけだと、ちょっと難しいと思います。特に近い人ほど相談できないというか、そういうこともあったりしますよね。今、

ABC ジャパンは福祉団体とか保育園とか、そういうところと一緒の建物に入っています。私たちの団体では外国人支援が得意で、もう一つ下の階にあるところは子どもの貧困であるとか、福祉問題に対応するのが得意。保育園はもちろん子どもの問題が得意。そういうふうにそれぞれちょっと得意な分野が違う団体が集まって、お互いに、「この子はうちの団体だけだとちょっと対応しにくいから、一緒に協力してやらない？」みたいなふうに連携してやったりしているのと、あとブラジル人の場合、やっぱり鶴見は比較的支援体制が整っている。一方で群馬とか、実はこれといった支援団体がなかったりして、問題が起きていることもブラジル人ネットワークで聞こえてくる。最近群馬のブラジル人の中でも、なんとかしなきゃという人たちがいるので、そういう人たちと連携して ABC ジャパンの群馬支部というのをつくって、密に常に向こうと連携を取って、「こういう時はどうするのがいいか」「鶴見ではどういうふうに対応していますか」というふうな形で他の地域の人にも対応できる体制づくりを進めているところです。

山本　ありがとうございました。最後に私からも１点お伺いしたいと思います。鈴木健さんのお話でも、もう既にいろんな交流をしたり、活動をしたりしている中で、コリアンの人たちだけじゃなく日本人の人たちもすごく増えてきているってお話がありました。この大学生も近所のインド人コミュニティに入って、せっかく学んでいるんだから何かしたいという気持ちがすごく強くあるというところもあります。

藤浪先生のお話だと、沖縄、ブラジル、鶴見というような、歴史的・地理的な距離をものともしないようなネットワークが強くある一方で、これだけ近い、地理的には、本当に坂を下りるだけの距離にあるのに、なかなかそれほど強いネットワークを築くことはできていない、

というところもあるんですよね。そうすると大学生がそういったコミュニティで何かしたいとか、何かつながりを持ちたいと思った時に、どんなふうにやっていけばいいのか。そして大学生がそういった地域の多文化共生の中でどういう役割を期待され、どういう役割を担っていけばいいのかとか、そういったところのお考えを、学生へのエールも含めてお話しいただければと思います。お願いします。

鈴木　そうですね。1つは今、徐々に徐々にいろんな大学で多文化なルーツを持つ学生って増えていっていると思うんですね。きっとここの大学でも、そういう多文化の背景を持つ学生というのは結構いるのかなと思うんですよね。なんか学生生活の中で、まずいろんなルーツを持つ人たちと知り合っていく、出会っていくということってね、大切なのかなと思うんですね。

当時、じゃあ社会の在り方としてどうなのかって言うと、残念ながら、今、先生おっしゃった通りね、これだけ外国籍の人、住人が増えている。でも出会う機会がないというところは、やっぱりどうにかしていかなきゃいけないと思うんですね。これってどういう状況なのかと言うと、一番最初、先生の方から話ありましたけど、やっぱり多文化との摩擦ということもやっぱり徐々に徐々に出てきて、今日話しなかったですけれども、私たち桜本というのはヘイトスピーチ、ヘイトデモ、朝鮮人死ね、殺せ、みたいな激しいデモのターゲットになって非常に大変な時期というのが続いていました。今後やっぱり日本でもそういう移民の多文化との摩擦みたいなことっていうのは、もしかしてどんどん残念ながら出てきてしまうのかなと思うんですね。

ただ、完全に日本がじゃあ移民を排斥するとか、多文化を排斥するというふうには、きっとならないと思うんですね。だけれども、僕、今ね、まだまだ排除には至らないけれども、外国籍の人も日本の人も

お互いに興味がない無関心社会みたいなところが今の現状だと思うんですね。だから、そこを変えていくというのは、きっと皆様の力だと思うんですね。皆さんがこれからの学生時代もそうですし、もっと社会に出た後で、どういった社会の中で暮らしていきたいのか、生きていきたいのか。そういったことを考えてみるといいかなと思うんですね。皆さんが社会を変えていく力になっていくということは絶対に間違いないと思います。ふれあい館、いろんな事業をやっていますけれども、学生のサポーターさんに来てもらって、なんとか成り立つものがあるんですよね。なので、ぜひふれあい館に見学に来てください。お待ちしています。

藤浪　私がさっきお話しましたように、大学生の時からボランティアとして活動しているんですけど、ボランティアって別に支援しているとかそういう意識はあんまりなくて、ただ遊びに行っているっていうだけで、友達とただ話をしにいっているだけ、みたいな感じでやってきたんですよね。でもある子どもが言っていたのは、ABC ジャパンが良かったのはそういういろんな大人が遊びにきているから、それで自分の見方とかがちょっと変わっていった。大学生はもちろんだし、いろんな仕事をしている人だったり、いろんなことを話してくれるというので、「あ、こんないろんな世界があるんだとか、そういうふうな世界が広がっていって、それがすごく楽しかった」というふうに言っていたんですよね。だから友だちになるというだけでも、大学生として十分意味があると思います。あと自分自身、理事長がよく一緒に「今日は飲み会しよう」とかそんな感じで、今日の話でしましたように日本人も外国人も関係なく受け入れてくれる感じだったのもすごく居心地がよかったんですよね。それで ABC ジャパンもたくさんいろんな大学から人が来たりとかしていて、同性代の友達もたくさんできると

いうのもあったりして、自分が楽しみという気持ちで、自分はそれはそれで自分の居場所だと思って参加していたので、そんな形で自分が楽しむ気持ちで、自分なりのかかわり方を見つけていければ、それでいいのではないでしょうか。

山本　大変貴重なお話をありがとうございました。今日、国際関係研究所のシンポジウムということでしたけれども、国際関係を身近な問題、身近な話題として考えていただく、とても良いきっかけになったのではないかと思います。改めまして、鈴木 健さん、藤浪 海先生、本当にありがとうございました。

（拍手）

山本　これで国際関係研究所シンポジウム、地域における多文化共生の現在地を終了とさせていただきます。本日はありがとうございました。